
愛すること

Luka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛すること

【Nコード】

N8778Y

【作者名】

Luka

【あらすじ】

ねえ。

いつかあなたが大切だっと思える人が現れたら。

その時は言ってね。

“ 寝っける。っけ。”

ブローグ

自殺志願者のあたし、ジュンコ。

いつも教室の窓から空を見上げては考えている。
いつか死んでやろうと。

この四角い部屋に閉じ込められてあたしは窮屈だった。
同じことをさせられて窮屈だった。

同じ黒い服を着て、
同じ髪型をして、
大人に教師にペコペコと頭を下げている。

あたしはその他大勢のガキじゃない。
あたしはあたしだ。

だから同じことはしたくない。

でも同じことをしなきゃ不良だとか言われる。

ただ、スカートを短くしただけ。

ただ、ボタンを変えただけ。

ただ、髪を茶色にしただけ。

ただ、マニキュアをしただけ。

ただ、メイクをしただけ。

ただ…

ただ…

ただ…

そんなあたしをみんな興味本位で見てる。

見られたいからそんなことをしているんじゃない。

あたしは“ここにいるよ”って言いたいだけ。

あたしは“生きてるよ”って言いたいだけ。

だって。

毎日が息苦しくて。

死んでいるのと変わらない。

生きているのか自分で分からなくなるんだもの。

だから、あたしは“ここににいるから”って叫んでるだけ。
誰かに見つけてもらうために。

あたしは“ここ”で“生きている”

四角い箱の中

朝、目覚めると重苦しい気分になる。

部屋のクローゼットに入ってる可愛くもない制服。

それを取り出して袖を通す。

学校という場合は、どうしてみんなと同じことをさせるのか。
不思議でなかった。

リビングに行っても誰もいない。

うちはママとふたりで暮らしていた。

ママは昨日、帰って来なかったらしい。

ママの部屋は昨日と同じように散乱したままだった。
ため息を吐くと、あたしはママの部屋を閉めた。

見たくない。

ママの部屋。

ママは昼間。

この部屋の中に男を連れ込んでやっていたんだろう。
その後仕事に出たきり帰って来ていない。

あたしは人として冷めているのかもしれない。

普通、自分の親のそんな現場を目撃したら驚愕するに決まってる。
ただどあたしは何も感じることなくその横を通り過ぎるだけだ。

そして終わったママは、何も言うつもりもないのか。

あたしと顔を合わせることもしないまま、家から出て行く。

それが当たり前になっている。

学校であたしが問題視されていることも知らん振り。

別になんか言っただけいいと思うてるわけじゃないけど、あたしは学校から冷たい視線を向けられている。

家を出たいと何度も思っている。
でも家を出れないことも分かっている。

あたしはまだ働くことも出来ない、ただのガキだから。

家の中も四角。
学校も四角。

どうしてこつも同じなんだろう。
毎日、同じことの繰り返しでイヤになる。

それがイヤなだけ。
ただ、それがイヤなだけ。

あたしはどうしたいのかも分からない。
無力な自分にイヤになる。

誰もあたしのことを理解はしてくれないだろう。

学校のクラスメートも理解はしないだろう。

テーブルの上に置かれている万札1枚。

今週はこれのお金で“生きなさい”という。

あたしはそれを財布に入れて、家を出る。

コンビニに立ち寄って、パンとお茶を買う。

そして歩きながらあたしはそれを食べる。

それがあたしの日課だった。

コンビニの前にはイカツイお兄さんたちがいつもと同じようにして座って話していた。

いつもあたしの顔を見てはまた話すという状態。

何か用があるわけでもないらしい。

ただ、見ているだけという状態。

そしてその傍をあたしは気にしないで通り過ぎていく。

ただ、気にしないだけ。

そうやって毎日、同じことの繰り返しだ。
毎朝会う、コンビニの店員さんも。
あたしに不審がることもなく。

ただ、あたしにパンを売る。

それだけのこと。

どこに行っても四角い箱の中にいる、あたし。
家も四角い。
学校も四角い。
立ち寄るコンビニも四角い。

どうして、こつも四角いんだろう。

あたしの目に映るものの全てが四角い。
持っている通学カバンも四角い。
生徒手帳も四角い。
筆箱も教科書もノートも四角い。

この世の中、四角いものだらけだ。
四角いものを見ると、ウンザリしてくる。

パンを食べながら、あたしは四角い箱の中へと入って行く。
門ではまた頭の固い大人の代表が立ってあたしを見据えている。
今日もまた四角い部屋で四角い紙に反省文なんてものを書かされる
だろう。

「小花！」
門を通り過ぎようとしたあたしに、先生が叫ぶ。

いつもと同じ。

門のところであたしを待ち構えている“センセイ”

あたしをジロツと見ては頭に怒りマークを出してくる。

「お前はいつもっ！」

怒鳴り声は四角い校舎の中まで聞こえるんじゃないかってくらいだ。

あたしは今日もまた短いスカート履いて、マニキュアつけて髪を赤く染めて、メイクをしているだけ。

ただ、それだけなのに。

どうしてそれがいけないんだろう。

あたしはそれが不思議でならない。

これをやめたらあたしじゃなくなるのに。

“センセイ”は“あたしじゃないあたしになれ”と言う。

いい加減、ウンザリしてきた。

それでもあたしたちは、“センセイ”に従っしかないんだ。

分かっているけど、それって酷くない？

自分自身を見失うんだよ？

“自分”というものが見えなくなるんだよ？

それをしたくないから、あたしはこうして“生きている”って訴える。

分かってはもらえないけど。

ま、分かって欲しいなんて思わないけどね。

「小花。放課後、生徒指導室に來い」

“センセイ”がそう言う。

だけど、それに答えることなくあたしは自分の四角い箱の中へ入って行く。

そんなあたしを見て、他の生徒たちは「またか」なんて思っているんだろう。

でもあたしは構わなかった。

“あたし”が“あたし”でいられるなら。

他のことなんかどうでも良かったんだ。

誰もいない空間

下駄箱で上履きに履き替えて校舎の中へ入る。
校舎の中はひんやりとしてて冷たい。

同級生や後輩がこっちを見ているけどお構いなしだ。
どうしてそんなにもジロジロと見るんだろうつて思うくらいだ。

3年のあたしの教室は1階の一番端。
この学校はベランダがある学校。
3年はベランダというより小さな庭だ。

よく女たちや男たちがその庭に出てはしゃべっていたり、キャッチ
ボールしていたりする。
あたしはそんなガキな彼らをボーと眺めているだけ。

ただ、眺めているだけ。

みんな、あたしには興味はない。
あたしがこんな格好していたって、別に気にしない。
授業中、勝手に教室を出て行ったとしても気にはしない。

受験生だから、余計なことに巻き込まれたくはないっていうのもあるらしい。

だからあたしはいつもひとりだ。
誰も声なんかかけては来ない。
かけて来られても困るけど。

「中学最後の夏休みかあ……」

ポツリと言ったあたし。
そんな声を聞く者もない。
もうすぐ、中学最後の夏休みがある。
あたしはまた家にいられない時間　とき　が始まる。

窓から空を見上げると、嫌味なくらいの爽やかな青い色をしていた。

「ほんと、嫌味だわ。その色」

あたしはどうしようもないくらいの疎外感に襲われる。
でも、それも仕方ないって思ってる。
それもいつものことだから、気にしない。

ただ、そう思ってしまっただけ。

いつものことを、ただ思ってしまっただけ。

授業中も休み時間もひとりだから、家にいてもひとり。
それはもう随分前からのことで。
あたしはそれを当たり前のことだと思ってる。
でも周りから見たら可哀想なヤツって見えてるんだろうな。

可哀相な目で見られてるあたし。
でも可哀相かどうかなんて、その人自信の物差しで決めるもの。

だからあたしは全然可哀相じゃない。

いやね、強がってるんじゃないかってほんとにそうなの。
だからそんな目で見ないでよ。

机に突っ伏してても分かるその視線にあたしはウンザリしていた。
クラスメートたちがそれぞれの仲のいいコと話していても、時折こ
っちを見ている。

それに気付かない程、あたしはバカじゃない。

まだあたしはいい方だと思うよ。

教室の隅にいるあのバカップルよりはマシ。
クラスメートたちがいる中で、ラブラブ中。
抱き合いキスをして、男が女の胸に触ってる。

教室でよくやるよ。
ほんと呆れてしまう。

あの女よりはバカじゃない。
簡単にいろんな男に乗っかっちゃうヤツよりは全然マシじゃないの。
確かあの女はついこの前まで他のクラスの男と付き合ってた
っけ。

「やっだ」

甘い声が教室に響く。

その声の方を見ないようにしているクラスメートたち。
だからあたしに視線を向けてるんだ。
そっちを見ないようにしているんだ。

いい迷惑。

あたしはその声を聞きたくなくて立ち上がった。
それを見ているクラスメート。

教室を出ると、あの女の甘い声が廊下まで響いていた。

廊下を歩いて、あたしは屋上へと上がる。

屋上には誰もいなくて、あたしだけの空間となった。

ここはいつも不良の先輩たちが屯っていた場所。

その先輩のリーダー格の人から、屋上の鍵を貰っていた。

あたしは不良ではないんだけど、妙に好かれていたらしい。
だからいつもここに来ていた。

先輩たちが卒業してから、この屋上はあたしだけの空間。
先輩たちのいないこの空間は少し寂しく感じていた。

そんなあたしだけの空間に来訪者が現れたのは、夏休みに入る少し前だった。

2コ下の男の子。

その子の名前はヨシキと言った。

彼は学校でも結構、名前の知れた不良だった。

その姉もかなりの不良だから、弟が不良になるのは分かる気がする。しかも彼にはい双子の弟がいた。

弟もまた不良だった。

ガシャン…。

屋上の扉が開いた。

そっちの方に視線を向けると、彼が立っていた。
金色の頭をした彼。

その目はまだ幼さを残していた。

「あれ。先約？」

そう言った彼はあたしをじっと見ていた。

あたしは彼から視線を外すと、グラウンドから死角になる場所で煙草を吸っていた。

「ねえ」

彼はあたしに近付きあたしの目線に合わせるようにしてしゃがみ込み、あたしの手から煙草を取った。
そしてそれを口にした。

「名前は？」

彼はそう言った。

あたしは彼の煙草を吸う姿を見ながら言った。

「ジュンコ」

って。

「ジュンコ先輩」

彼はその日から、妙にあたしに懐いてきた。

ニコニコとした顔であたしにくっついて来る。

人に好かれることなんかないあたしだから、ちょっと戸惑ってしまっただけどなんか居心地が良かった。

ニコニコとしている彼だけど、時折寂しそうな顔をしている。
だから思ったんだ。

あたしと同じ。

でも、実際はあたしとは同じじゃなかったんだ。

「ジュンコさんはさ、なんでいつもここにいるの？それにこの鍵
もなんで持ってるの？」

彼はあたしの隣で煙草を吸っていた。

あたしが煙草をあげた。

あたしと同じ匂い。

あの日。

彼は初めて煙草を吸ったのだと言う。

でも今はもうだいぶん慣れたのか、普通に吸ってる。

「まったく。1年が煙草を吸うなんて」
「教えてくれたのはジュンコさんでしょ」

そう言つて、吸つていた煙草をあたしに啜えさせた。
あたしはそれを手に煙草の煙を吐いた。

「ここの鍵はね、卒業した先輩から貰つたの。先輩もそのまた先輩から貰つたみたい」

あたしは彼と話することが楽しかった。

いつもひとりで、誰とも話すこともしなかった。

だから彼と話すことは、自分を解放出来る唯一の時間だった。

誰もいなかった空間は少し、賑やかになった。

冷たい目

あたしは自分の目が冷たいって思ってる。
でも。

彼の目も負けず劣らずに冷たいと思う。

幼さの残るその目に、冷たさが宿る。

何がそんな目にさせたのかあたしには分からない。

今日もまたこうしてあたしの隣に彼はいる。
あたしと同じ匂いをつけて。

「ジュンコさんってキレイだね」
突如そう言った彼に驚いた。
何を言い出すのかと思って驚いた。

「なによ、いきなり」
あたしはヨシキの顔から視線を逸らした。
そんなあたしにふっと笑って見せた彼は、
年下には見えなかった。

「ほんとだよ」

彼はそう言つと、あたしの髪に触れてきた。

男にそうやって髪を触られたりすることがなかったから、どうしたらいいのが困ってしまった。

あたし、絶対、顔真っ赤だ。

そう確信出来る程だった。

「俺、初めてだよ」

そう言ったヨシキに視線を戻すと、ニコツと笑った彼がそこにあつた。

でもすぐにその顔が変わつたのを見逃さなかった。

冷たい、目をしていた。

その目を見た時、不覚にもちよつと怖いと感じてしまった。

でもその目はほんの一瞬で、すぐに元のあのヤンチャな目に戻っていた。

「なにが初めてなの」

あたしはそう聞くと、煙草を咥えて空を見上げた。

「女をキレイって思ったの」

「なに言ってるの」

「ほんとだつて」

隣に座るヨシキもあたしと同じように煙草を咥えてる。

あたしと同じマルボロの匂い。

まだ幼い顔をしたコが、数ヶ月前までランドセルを背負ってたコが、こうして隣に座って授業をサボり煙草を吸ってる。

それがまた可笑しい光景。

髪を金色にしたこのコは、あたしにとって癒しのような安らぎを与えてくれた。

そんなコなのに、どうしてあんな目をしているのか不思議でならなかった。

「ヨシキはさー…」

あたしは疑問に思ったことを口にしてみた。

「どうしてここに来るの？」

そう。

この空間はあたしだけのものだった。

「んー…なんだろうな」

少し考えた後にそう答えたヨシキは、やっぱり子供っぽさが抜け切れてない。

その顔から、小学校の時はやんちゃでみんなと一緒に思いっきり野球やサッカーをやっていたコなんだろうなって思った。

「あたしとここにいるより、同じ年のコと遊んだ方が楽しいんじゃないの？」

「あー…」

また考えるように唸って、ヨシキはこっちを見た。

「俺、もうそういうのやめたんだ」

「なんで？」

「ガキじゃねーんだ。そう言うことしたって楽しくねーし」

「じゃ、部活は？うちの学校、部活は絶対だよ」

うちの学校は部活は絶対に入らなきゃいけない学校。

でも名前だけのコは結構いる。

現にあたしだって、陸上部に所属しているけど練習には出ていない。
名前のだけの陸上部。

「あ。俺、一応サッカー部」

思い出したかのように言うヨシキは、「面倒くさい」と言いたげだった。

「サッカー部なの？」

「うん。行ってねーけど」

「へえ」

「ジュンコさんだって、行ってないでしょ。部活」

「まあね」

なんで陸上部にしたかって。

そりゃ、足だけは自信があったから。

でも、いつの間にか走ることはイヤになってしまった。

走っても褒めてくれる人はいないから。

ヨシキもあたしと同じような理由で行っていないのかなって思った。

ヨシキが冷たい目をしているのは誰の所為かって考えなくても分かった。

ヨシキの家はこの街で一番の病院。
その医院長を父親はしている。

ヨシキと姉と弟が何か問題を起すと金で解決しようとするらしい。
無駄にお金がある家だら、冷めた家庭なのかもしれない。

だから、こんな冷たい目をしているのかもしれないとあたしは思った。

教室に戻ると、クラスメートたちの痛い視線を浴びる。

それを完全にムシして自分の机に座る。

一応は授業に出てやろうと思う時がある。

でも勉強なんかしたくないっていう気持ちはどこかにあるから、全く授業内容は聞いていない。

この時間は数学の授業だった。

数学は数字を見ているだけで眠くなる。

あたしは基本、文系だから。

「……こら！そこ！」
と、あたしの頭を叩く先生。
寝るなって言いたいらしい。
でもほっという欲しいと思う。

普段、寝てないんだから学校にいる時間くらい寝かせてよと思う。
でもそんなことは通用しなくて、起されて教科書を見る。
教科書を覗いてもあたしにはさっぱり分からなかった。

“ 冷たい目をしている ”

そう言われることはよくある。
だけど、冷たい目をしている人に会うことはないって思ってた。
ヨシキはあたしが会った初めての“ 冷たい目 ”をしたコだった。

だから、最初はあたしと同じだって思った。
でも、あたしと同じじゃない。

それは分かってる。

あたしはあたし。
彼は彼。

“同じ”じゃない。

あたしの歪みはあたしだけのもので、彼の歪みも彼だけのもの。
誰も分かってはくれない。

分かろうともしてはくれない。

そんなことをボーと授業中考えていた。
答えなんかは出ない、あたしの中にある問題。
それを誰が解いてくれる????

あたしはこれから先、何を見ていけばいいのか分からないんだ。
どうしていけないのか分からないんだ。

常に付き纏う、自殺願望。

“ここ”にはあたしの“居場所”はもうないって何度も言ってる。
そんなあたしにヨシキは屈託のない笑顔を向けてくる。
その笑顔があたしの心に問いかけてる。

“もつと知りたい…” って。

彼を知りたい。

彼の冷たい目の理由を知りたい。

そう思うようになったんだ。

放課後。

昇降口を出て、学校を出て行く。

グラウンドを見てはため息を吐く。

そこには陸上部が練習をしていた。

3年生は夏までだから、あまりいない。

あたしの後輩たちが一生懸命に走ってる。

その姿を羨ましいなんてことは思わなくなってる。

走ることは、あたしにとって生きてるって意味を実感する術だった。

でも今は違う。

生きてるって意味が分からなくなってるから。

学校から自宅まで歩いている途中で、携帯が音をたてて鳴った。

画面には“木下大樹”と記されている。

木下大樹はあたしの1コマ上の先輩。

去年、うちの学校を卒業して行った先輩。

あたしの処女を奪った相手だ。

「はい」

あたしは電話に出るといつもの低い声が聞こえた。

『今夜、9時。倉庫にまで来い』

それだけ言つとガチャツと電話を切られた。

あたしは最早反論はしない。

その電話が入るとあたしは大樹に抱かれるってこと。

別に付き合つてゐるわけじゃないけど、いつからかそうだった。

初めての時はどうだったかなんて覚えてゐるわけない。

あたしにはそんなもん、必要ないし。

大樹は“黒龍”のナンバー1。

つい最近、バイクの免許を取ったヤツは高校にも行かずにフラフラしている。

高校にはまだ籍はあるらしいが辞めると言つてゐる。

夜、8時に家を出る。

家を出る時、母親は男とやつてた。

今日は仕事は休みらしい。

母親の部屋からは母親と男の官能的な声が洩れていた。

わざと聞かせているんじゃないかってくらい、大声で喘いでいた。

その声にウンザリしてため息を吐く。

そしてあたしはこれからこの母親と同じことをやり、に倉庫にまで行くのかと思うと更にウンザリした。

タクシーを使つて、黒龍の溜まり場近くまで行く。

そこまで行つて後は歩いて倉庫まで行く。

倉庫に行くまで黒龍系列が溜まり場になっているバーやクラブが立ち並び。

そして廃港の入り口に差し掛かると見た顔が揃っていた。

これから“走り”に行くんだろう。

あたしはその中を通つて倉庫に近付く。

そしてその中心にいる男を睨んだ。

「遅え……」

不機嫌丸出しのこの男が、大樹。

あたしを性的処理の道具に使つてる男。

大樹があたしを車に押し込むと運転手に「行け」と告げた。

車が走り出すと、バイクに跨つてる面々もエンジンを蒸かし走り出した。

大樹は走りの後に必ずあたしを抱く。
でもその行為はあたしは好きじゃない。
乱暴に抱かれるその行為が好きじゃない。

今も車の後部座席で大樹は偉そうに座り、右手であたしの太腿に触
つてきている。

あたしが何の反応がないのがムカツクらしく、その右手がエスカレ
ートして来てスカートの中にまで入って来る。
目の前には運転手の男がいる。
その男はこんなことをされてるあたしに見向きもしないでただ車を
走らせていた。

大樹の手はあたしの密部へと滑らせて来た。
閉じていた足を無理矢理開かせてその中へ指を入れて来る。

こういうことも、慣れてしまつて何も言わない。
声を出すこともしない。

だから、大樹は逆に面白がつてあたしを車の中で犯す。
後部座席にあたしを押し倒し、あたしの服を捲り上げる。
まるでレイプでもされてるようなその状況。
それでもあたしは何も言わないし、声を上げることもしない。

車の揺れと大樹の身体の揺れ。

その揺れがあたしの身体に伝わる。

あたしの中に大樹のモノが入ってきててもあたしは何も言わない。
声を上げることなく、大樹があたしの中に欲望を吐き出す。

この行為はいつものこと。

だから気にしない。

あたしはこの行為を好きじゃないってことは、大樹は知ってる。
知っててあたしを抱く。

人はなぜセックスをするんだろう。

この時に必ず思う。

あたしはこの行為の意味が分からない。

いつの間にか車は倉庫へ戻って来ていた。

バイクは囷となってあちこちに散らばったらしく、倉庫には誰も戻
って来ていない。

車から降ろされたあたしは大樹に引っ張られて倉庫の中へ入る。

倉庫の中は、大樹たち幹部しか入れない部屋がある。

あたしはそこには入ったことはないが、その隣の大樹だけが使ってる部屋に入れられる。

その部屋はベッドがポツンと置かれている。

この部屋は暴走が終わった大樹があたしを抱く場所。

もしかしたらこの部屋には他の女も連れ込んでいるのかもしれない。

ベッドに叩きつけられるように押し倒されたあたしは、大樹の顔を見た。

実際、大樹の顔を見ているのか見ていないのか分からないけど大樹の顔を見ていた。

その時の目がとても冷たいと自分でも思っていた。

そして、大樹の目も冷たかった。

冷たい……というより、怖かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8778y/>

愛するということ

2011年11月30日00時57分発行